

『大草原の小さな家』におけるネイティブ・アメリカン表象

山 田 健 太 郎

On the Representation of Native Americans in *Little House on the Prairie*

Kentaro Yamada

Abstract

The representation of Native Americans in *Little House on the Prairie* is far from simplistic. While reactions of characters in the novel to Native Americans have a wide diversity from strong hatred to empathy, images of Native Americans are also varied, from wild men to noble savages. Many of the disputes on the evaluation of this novel seem to result from this complexity, each building their discussion on different aspects of images represented in the work. In this article, we will re-examine the representation of Native Americans in this novel and try to trace back its complexity to the author's mixture of intentions as well as the complexity in the minds of frontier women at the time of the drama of *Little House on the Prairie*.

Keywords: Native American, Indian, Representation, American West, Laura Ingalls Wilder

はじめに

日本でもかなり広く知られている『大草原の小さな家』(*Little House on the Prairie*, 以下『大草原』)は、アメリカの西部開拓時代を背景とした、古き良きアメリカの家族の物語として一般的に受け止められている(高田 126)。しかし実際にその作品を読めば、開拓移民が、インディアン・テリトリーと呼ばれたネイティブ・アメリカンの土地に入り込みながら共生を試みるという、矛盾の多い複雑な社会的問題を孕んだ作品であることに気づく。

ローラ・インガルス・ワイルダー(Laura Ingalls Wilder, 以下ワイルダー)という名の白人女性作家によって開拓時代のネイティブ・アメリカンが描かれる小説といえば、当然そこにヨーロッパ中心主義的、あるいは白人中心主義の他者表象があることが予想されるが、しかし作品を詳細に読めばわかるように、問題はさほど単純ではない。¹ もちろん、人種偏見に対する問題意識が現在に比べてはるかに低い社会を背景に創作された作品であるゆえに、そこには当然ながらその文化的価値が浸透しており、典型的にネイティブ・アメリカンを他者とした表象は数多くみられる。しかし、その一方で、この作品の中には、ネイティブ・アメリカンと共生する感情、共感す

る感情も織り込まれており、全体としては、かなり複雑なネイティブ・アメリカン表象となっている。本論文では、この作品におけるネイティブ・アメリカンの表象について、特にそれがどのようなイメージの複合体となっており、それらがどのような解釈を示唆しているかについてこれまでの研究を参照しながら考察をし、この作品の今日的な意義について考えたい。

『大草原』創作までの経緯

この作品は、ワイルダーが、自分の幼少期から成人にいたるまでのインガルス家の開拓地体験を児童向けに自伝的小説として書いた、いわゆる『小さな家』シリーズと呼ばれる9作品の3作目、ローラを主人公とした物語としては2作目に当たる。このシリーズの土台となっているのは、すでに作家として活躍していた娘のローズ・ワイルダー・レインに勧められて1930年に書いた「開拓地の娘」(“Pioneer Girl”)である(Miller 181)。約200ページに及ぶこの自伝は、しかしながら出版社が見つからなかった。出版元を探す間にローズがその一部を子供向けの物語にした「おばあちゃんが小さな女の子だったころ」(“When Granma Was a Little Girl”)が大手出版社の児童書部門の編集者の目にとまり、その編集者からのもっと長い物語をという要望に答えて、ローズの援助を受けながらワイルダーが完成させたのが、1932年に出版された『大きな森の小さな家』(*Little House in the Big Woods*, 以下『大きな森』)である(Miller 181-87)。

この出版をきっかけに、ワイルダーは物語シリーズの構想を持つようになる。そして、1933年に『農場の少年』(*Farmer Boy*)を出版すると、その前後からインディアン・テリトリーで過ごした日々を小説にすることを考えていたワイルダーは、過去の記憶で不確かな部分を調べ、1934年には「インディアン児童もの」(“Indian juvenile”)と母娘間で呼んでいた物語を書き上げた(Miller 188-205)。その後出版社とのやりとりでタイトルは *Little House on the Prairie* に決定され、1935年に出版された。

『大草原』において、ワイルダーは自伝的な事実からかなり離れることになる。現実にインガルス家がインディアン・テリトリーで暮らしたのは、1869年から70年にかけてのことであるが、当時ローラは2歳足らずであり、第1作の『大きな森』に描かれるウィスコンシンでの生活の以前のことであった(Wolf 13, Miller 22-23)。しかしながら、「小さな家」シリーズの展開では、この時系列を逆転させ、ウィスコンシンからカンザスに移住をすることになった。すでに第1作で現実より少し年上の5歳で設定されていたローラは、『大草原』では作品展開の都合上6歳になっていることになっており、現実とは3歳以上年上ということになる。さらに、2歳のローラに当時の明確な記憶はほとんどなく、『大草原』に描かれる生活は、その後ローラが家族から聞いたエピソードがほとんどである。それだけではなく想像で描かれたものもかなりある(Wolf 15, Fellman 81, 86)。つまり、この作品は「自伝的」な要素がたしかにふんだんに盛り込まれているが、基本的には虚構の物語なのである。この虚構性がこの作品におけるインディアン表象の多様性を可能にし、この作品を多義的なものにしていていると考える。『大草原』をめぐる賛否両論の批評は、この部分に起因することが大きいように思われる。この点については、後であらためて考察したい。

荒野と文明

『大きな森』のローラ物語続編として世に出された『大草原』は、ウィスコンシンの森に囲まれた小さな村に住むインガルス家が、その地を離れる場面から物語が始まる。周囲に人が住むよ

うになるにつれ失われつつある自然に物足りなさを感じるローラの父チャールズが、野性の動物がまだ豊かに棲息するインディアン・テリトリーに新天地を求めることを決意し、移住することになるのである。こうした自然と文明、あるいは荒野と文明というテーマは、『小さな家』シリーズ全体の中でも様々な形でみられるが、『大草原』において特に顕著に表れている。動物の生き活きとした様子や、広大な大平原と隠れたところにある窪地、川沿いに育つ木々や草原を覆い尽くす草花など、大草原の自然が叙情豊かに描写されている。Virginia L. Wolfは、荒野と文明の二項対立の構図を描き荒野の中に郷愁的な価値を見出そうとする原始主義が、この作品の中心的テーマの一つと考えている(104-15)。ただし、インガルス家は開拓者としてその自然の中に住み着こうとしているわけで、自然を愛する一方で文明による自然破壊の先鋒となっているという矛盾を抱えていることは否定することができない。チャールズが表明するのは、あくまでも文明を中心にした世界観の中での自然に対する憧れに過ぎないからである。

『大草原』におけるこの文明を中心にした自然／文明という構図の中で、ネイティブ・アメリカンはあたかも当然であるかのように自然の中に組み込まれている。

In the long winter evenings he talked to Ma about the Western country. In the West the land was level, and there were no trees. The grass grew thick and high. There the wild animals wandered and fed as though they were in a pasture that stretched much farther than a man could see, and there were no settlers. Only Indians lived there(2).

引用は、チャールズがキャロラインに西部の魅力について語る場面で、自然が広がる大地について描写する言葉が「インディアンしか住んでいない」という表現で締めくくられている。Robert F. Berkhofer, Jr.は、インディアンというイメージがヨーロッパを中心とした白人によってどのように形成されるようになったかを辿っているが、その中でインカやアステカのような高度な文明社会があったにもかかわらず、そのような文明社会を形成していない部族との接触が多かったフランス人、イギリス人は、植民地時代の北アメリカにおけるインディアンを、単一的に野蛮人としてイメージするようになったと述べている(12-13)。さらにステレオタイプ化したインディアン・イメージは、その後アメリカ社会に根強く残り、現代社会においてすら生き続けていると述べている(25-31)。この引用部においてもネイティブ・アメリカンは、まさしく典型的に、他者として文明の側である白人移住者とは区別され、物語の背景となる自然の一部に書き込まれた表象となっている。そして、それはこの小説全体を形成する一つの大きな言説(ディスコース)でもある。

この自然／文明、あるいは荒野／文明の構図の中で、同じ白人でも、作中人物の立場はそれぞれ少しずつ異なる位置づけになっている。そして、それはまたネイティブ・アメリカンに対する態度と密接につながっている。まずチャールズは、すでに述べたように自然・荒野への強い憧れをもつ人物である。ネイティブ・アメリカンへの共感も強く、知識も豊富である。これに対して妻のキャロラインは、夫の意向に従って自然の中での生活をしながらも、文明的な価値を自分のアイデンティティーの中心においている。そのことは、日常生活で娘たちに服装や食事のマナーなど文明的な作法を身につけさせることに絶えず心を砕いていることから明白であり、暖炉が完成したときにその上に飾った陶磁器の女性像によっても象徴的に表現されている(117)。しかし同時にネイティブ・アメリカンに対する恐怖と軽蔑のまざりあった、野蛮人というイメージも抱いている。ローラの無邪気で直接的な「どうしてお母さんはインディアンが嫌いなの」という問いに、つい「インディアンは嫌いよ」と言ってしまう場面すらある(46)。

この二人の夫婦の間で、ローラは、自然を求める父親に強く共感を持っている。感情の赴くままに行動をしがちなローラは、抑制的なものが嫌いで、母親からは、外に出るときにボンネットをかぶらなかつたり(123)、食事中に食べながら話をしたりと(46)、いつも作法を守らないことで注意を受ける。そして、その自然に対する憧れの気持ちにそって、インディアンに対しても、時には恐怖心を持つこともあるが、強く惹かれる人物として描かれる。一方、姉のメアリーは典型的な「良い子」で母親の価値観に近く、ローラと同じように外で遊ぶことを楽しみもするが、彼女ほどの強い自然に対する興味を表現することがない。

同じインディアン・テリトリーの(違法)居住者である隣人たちも、この自然と文明の構図の中で、少しずつ異なる立場の表象となっている。まずスコット夫妻は、典型的な白人中心主義であり、文明中心的な世界観を強く表明している。彼らによれば、「土地は耕す者のものとなるべき」であり「良いインディアンは死んだインディアン」だと言う(211, 284)。ある意味では西部開拓時代には広く広がっていたこの考え方は、しかしながら、作家の価値観とは大きく異なり、そのことは、スコット夫婦が頑迷な人物として描かれるエピソード、すなわち井戸掘りに地底のガスを毎回調べることなど不要としたスコット氏や(153)、マラリアの原因が西瓜のせいだと主張して譲らなかつたスコット夫人(192-3)の姿によって示唆されている。独身のエドワードはそこまで強硬な偏見を持ってはいないが、草原の火事はネイティブ・アメリカンたちが白人を追い出そうとして起こしたのではないかとするスコット氏の意見を共有し(283)、不穏な様子を見せているネイティブ・アメリカンの襲撃に備えてバリケードを築く彼の考えに同調するなど(288-89)、やはり白人中心主義に基づく典型的な(違法)居住者の考え方である。例外的には、マラリアに罹ったインガルス家を救った黒人医師のタン博士のように、インディアンのために医療活動をインディアン・テリトリーでする人物もこの作品には描かれている。これに加えて、ジャックのことも少しふれておきたい。ジャックは犬ではあるが、この荒野/文明の構図においては、絶えず文明の側のローラ家を狼などの自然から守る存在となっている。ネイティブ・アメリカンに対しても敵愾心を一貫して持ち続けており、ある意味では、文明社会の白人に根強くある感情的な敵対心を反映した象徴的な存在とも言える。

パプースという言葉について

『大草原』は、ローラの父のインディアン・テリトリーに移住する決定から始まるわけであるが、物語の主人公はローラであり、彼女が体験することを感じる事が物語の中心である。この作品におけるネイティブ・アメリカン表象も、父親の言葉によって喚起されたネイティブ・アメリカンの子供を意味する「パプース」(papoose)へのローラの強い関心と共に展開し始める。ウィスコンシン村に住む親戚に別れの挨拶をして西部への旅路につくと、チャールズは娘たちに西部への興味を掻き立てようと、ローラに「西部に行くとパプースが見られる」と言う(6)。ここから先、この物語の半ばでネイティブ・アメリカンに実際に出会うまで、ローラはパプースを見ることに執着と言えるほどの強い期待を持ち続け、何度も父親にいつ会えるのかと聞くことになる。

ローラは無邪気に、そして父親のチャールズもあまり意識することなく使っているこの言葉も、上で述べた、ネイティブ・アメリカンを自然の風景の中にある他者として位置付ける白人中心主義の言説に連なるものである。そうした価値観は、父親が「小鹿や小熊や狼を見せてくれるように、いつかパプースも見せてくれる」と考えるローラによってより明確に表現されている(56)。Sharon Smuldersは、このパプースという言葉が、ネイティブ・アメリカンのナラガンセット族

に固有な言葉であったものを、白人がすべてのネイティブ・アメリカンに区別なく適用をするに至ったものであると指摘し、さらに『大草原』では、このような言語使用により、ネイティブ・アメリカンは「ただ単に奇妙なだけではなく非人間的なものとして立ち現われる」としている(193)。

野蛮イメージ

家も完成し、さらには暖炉まででき、大草原での生活がようやく安定し始めたある日、ローラは初めてネイティブ・アメリカンに遭遇する。ジャックの異様な様子に気づいて視線を上げると、目の前に近づきつつあるネイティブ・アメリカンの姿があったのである。それまでは、パプースという知らないものへの憧れという形でしかネイティブ・アメリカンを描いていなかったローラは、思いがけない現実のネイティブ・アメリカンの出現に慄く。そして家の中に入っていったネイティブ・アメリカンを後から追って家に入り、板に隠れながら恐る恐る観察する。

First she saw their leather moccasins. Then their stringy, bare, red-brown legs, all the way up. Around their waists each of the Indians wore a leather thong, and the furry skin of a small animal hung down in front. The fur was striped black and white, and now Laura knew what made that smell. The skins were fresh skunk skins. A knife like Pa's hunting-knife, and a hatchet like Pa's hatchet, were stuck into each skunk skin.

The Indians' ribs made little ridges up their bare sides. Their arms were folded on their chests. At last Laura looked again at their faces, and she dodged quickly behind the slab.

Their faces were bold and fierce and terrible. Their black eyes glittered. High on their foreheads and above their ears where hair grows, these wild men had no hair. But on top of their heads a tuft of hair stood straight up. It was wound around with string, and feathers were stuck in it (138-40).

Berkhoferは、白人が創り出した「インディアン」像が、時代や場所により変遷と多様性があるものの、野蛮と高貴の二面性を基本としたものであることを指摘しているが(4-22, 71-111)、ここでその野蛮イメージが典型的に現れている。この引用箇所より少し前には彼らの眼が「蛇のよう」と描かれていることが端的に示すように(134)、非人間的で感情も理解できない存在として表現されている。ジェスチャーで欲しいものを伝えたりなどはするものの、ほとんどまともにコミュニケーションを取ろうとすることはなく、立ち去る前に言葉ではなく、叫び声を発するなど、動物的な人間として描かれる(140)。Smuldersは、頭髪の詳細はたしかにオサージ族などの特徴として正確なものであるものの、この場面全体を通じた感覚に訴える違和感は、人種差別的なステレオタイプを増長するものであると批判している(197)。Dennis McAuliffeも、ネイティブ・アメリカンの血を引く者として、この描写はあまりにも残虐さと悪臭を強調し過ぎていると非難している(113)。またネイティブ・アメリカン系の作家であるMichael Dorrisも、この作品を読む意義については認めながらも、ネイティブ・アメリカンとしてこの箇所を読むことに強い抵抗感を表明している(1821)。

この章のネイティブ・アメリカン表象でとりわけ強調して描出されているのは、頭髪の様子と裸体、そして身にまとったスカンクの毛皮の悪臭である。ところでGlenda Rileyは、西部開拓時代の女性の手記を中心に、当時の女性たちがどのようなネイティブ・アメリカンについてのイ

メージを植え付けられまた育んだかを丹念に調査している。そしてまず一つの典型的な精神的なタイプとして、明白な運命のもと、キリスト教精神を広げることが奨励する当時の言説が、開拓地へと向かう女性たちに、高貴で野蛮なネイティブ・アメリカンがいかに彼女たちの差し伸べる手を必要とし、また同時に差し伸べるに値する存在であるかを強くイメージとして植え付けたことを指摘している(11-48)。この言説には、すでに紹介したBerkhoferが指摘するところの高貴と野蛮の二面性が明らかに見てとれる。そしてこの二面性が辺境の開拓地で過ごす彼女たちの不安によって増幅され、敬虔なキリスト教徒として西部開拓地に向かった女性たちは、その境遇に特有の相容れない様々なイメージ群を手記等の記録に残している。Rileyは、その中で「悪い」インディアン・イメージの代表的なものとして、裸体と服装の奇抜さと不潔を挙げている(137-140)。道徳的に劣っているという目で見ればなおさらのこと、キリスト教的道徳観を信条とする女性には、ほとんど裸体のネイティブ・アメリカンの姿は、性的な放埒を連想するものに思われたのであろうし、服装も文化的美観を理解できない人間の奇抜な姿に見え、また肌の色と毛皮などの衣服は、実際の衛生状態とは関係なく不潔さを印象づけたのである。否定的な連想は、不潔さからさらに悪臭を放つイメージにまで至る場合もかなりあったと指摘している(140-41)。『大草原』のこの場面に立ち現われるネイティブ・アメリカン像は、こうした経験とかなり重なり合っていることに気がつく。同様の調査をワイルダーが執筆前にしたとは考えられないが、少なくともいくつかの実体験の証言が、特に西部開拓時代を経験した女性から得られれば、同様のイメージとなることは自然なことに思われる。今日の価値観からすれば、あまりに人種差別的なステレオタイプではあるが、西部開拓時代の白人女性が不安の中で描いたイメージの代表的なものとなっていることも事実である。もちろん、ここでとりあげたイメージは、ネイティブ・アメリカン像のなかでも「悪い」、言い換えれば野蛮に連なるイメージであり、Rileyが集めた証言には、「良い」イメージも含まれる。女性の中には、実際にネイティブ・アメリカンと多く触れ合うようになって、より人間味のある豊かなイメージをもつようになった例も数多く紹介されている(149-65)。『大草原』においても、ローラの異文化体験の衝撃を強く印象づけるかのように、ネガティブなステレオタイプが集められたかのようなこの章のネイティブ・アメリカン像は、この後別のイメージによって上塗りされることになる。強烈な悪臭とネイティブ・アメリカンを結びつけたスカンクの皮は、あたかも彼らが特殊な部族であったかのように、ここでしか描かれることがない。

同時に、この異文化接触の衝撃を強調しているように見える場面でも、その一方で彼らが携帯していた手斧やナイフをローラの父親チャールズのものと同じようなものとして描写することで、言説の中に共通性を志向する価値が混在していることも注目しておくべきであろう。

共感的関心

ローラやメアリーだけでなく母親のキャロラインまでも震え上がらせた突然のネイティブ・アメリカンの出現であったが、その後忽然と近くからは姿を消してしまう。その時の記憶も次第に消えつつあったある日、チャールズがインディアン・キャンプを見に行こうと誘うと、ローラは手を叩いて喜びメアリーとついて行く。そして、いざ近づいてみると不安を感じ始めたローラとメアリーの手をとって、チャールズはネイティブ・アメリカンが立ち去った後のキャンプ跡を案内する。

There were ashes where Indian camp fires had been. There were holes in the ground where

tent-poles had been driven. Bones were scattered where Indian dogs had gnawed them. All along the sides of the hollow, Indian ponies had bitten the grasses short....Pa read the tracks for Mary and Laura. He showed them tracks of two middle-sized moccasins by the edge of a camp fire's ashes. An Indian woman had squatted there. She wore a leather skirt with fringes; the tiny marks of the fringe were in the dust (175-76).

キャンプ跡の描写は、テントの支柱を立てていた地面の穴から始まり、ネイティブ・アメリカンの飼っている犬が齧っていた骨、彼らの馬が食んで短くなった草と続く。ローラの家ネイティブ・アメリカンが現れた時には、白人の家に突然出現した他者の違いが強く描かれたが、この場面では同じ他者に関するものでありながら、ローラたちの生活との共通点が浮き彫りになる。家と犬と馬という生活のセットは、ローラたちの生活とネイティブ・アメリカンの生活が基本的に同じ構造をもっていることを示唆しており、まるで鏡写しのような類似性が強調されている。

続いてチャールズは、地面に残った跡から、ネイティブ・アメリカンの生活を読み取りだす。Ann Rominesが指摘するように、細かな痕跡を観察して、そこで営まれていたネイティブ・アメリカンの生活を、ローラとメアリーの目の前に再現してみせるチャールズは、あたかも文化人類学者であるかのように知識が豊富であり、細部まで注意深く観察する(62)。父親の指導でローラとメアリーはネイティブ・アメリカンの生活を共生するかのように体感し、そこに自分たちと共通するものを発見していく。そして、チャールズの「そこにあった土鍋で煮ていたものが何か当ててごらん」という言葉に、ローラとメアリーがそこに残された骨を見て即座に「うさぎ」と答えたとき(177)、ネイティブ・アメリカンの生活とローラたちの生活は、共感によってぴったりと重ね合わせられる。

このインディアン・キャンプのエピソードは、まるでネイティブ・アメリカンからのプレゼントであるかのように地面に落ちていた様々な彩のビーズを、ローラとメアリーが夢中になって集めて持ち帰り、首飾りを作ることで終わる(177-81)。Rominesは、このビーズが交易によってヨーロッパからネイティブ・アメリカンにもたらされたものであり、文化交流を示す品であるという(63)。ヨーロッパ人からネイティブ・アメリカンに贈られたものが、こんどはローラたちの家庭で首飾りとして身につけられる。文化が対立するものではなく循環するものであることがこのエピソードによって示唆されているといえよう。

高貴イメージ

『大草原』では、Berkhoferがネイティブ・アメリカンのイメージの基本的なものとして挙げているもう一つである高貴イメージが作品後半で描かれる。さらにいえば、この高貴なネイティブ・アメリカンというイメージの余韻の中で作品は完結する。「背の高いインディアン」(The Tall Indian)という章でローラの家姿を現したネイティブ・アメリカンは、前回現れたものたちとはずいぶん様子が違う。チャールズとインディアン風の挨拶を交わすと、家の中に入り礼儀正しく暖炉の傍らにしゃがみ、キャロラインが出した食事を静かに食べ、チャールズが勤めたタバコをふかす。

All this time nobody had said anything. But now the Indian said something to Pa. Pa shook his head and said, "No speak."

A while longer they all sat silent. Then the Indian rose up and went away without a sound.

“ My goodness gracious! ” Ma said.

Laura and Mary ran to the window. They saw the Indian’s straight back, riding away on a pony. He held a gun across his knees, its ends stuck out on either side of him.

Pa said that Indian was no common trash. He guessed by the scalplock that he was an Osage.

“ Unless I miss my guess, ” Pa said, “ that was French he spoke. I wish I had picked up some of that lingo. ” (229)

威厳のある振る舞いと礼儀正しさは、先に紹介した場面で野蛮人として描かれたネイティブ・アメリカンとは対照的である。ここに登場するネイティブ・アメリカンは、フランス語を話すことになっており、当然ネイティブ・アメリカンの言語も話すので、バイリンガルということになり、高度な知性を持つことが示唆される。立ち去り行く姿も威厳に満ちているが、馬に乗りさらに膝には銃を乗せている(229)。この馬も銃も本来はヨーロッパからもたらされたものであり、ネイティブ・アメリカンの文明化の象徴となっている。² 同じことが、モカシンを飾っていたピーズ(228)についてもいえる。荒野/文明の2項対立の構図はここでは崩れ、ネイティブ・アメリカンは、白人の生活の背景となる荒野の中の自然の一部ではもはやない。

この場面では、チャールズとキャロラインの反応の違いが二人の価値観のギャップを浮き彫りにしている。その高貴さに感銘を受けたチャールズに対して、キャロラインは、立ち去ってくれて良かった、と野蛮なネイティブ・アメリカンが家に来た時とあまり変わらない感想を表明している。まだネイティブ・アメリカンとの接触が少ないキャロラインには、Rileyが紹介したような西部開拓地の女性に観察されるネイティブ・アメリカン像の変化はまだ起こっていないようである。同様に犬のジャックも、このネイティブ・アメリカンを嫌う感情を露骨に表現する。この章の最初で、ジャックがインディアンを嫌う気持ちがよくわかるとキャロラインが言っているように(227)、ここではこの二人の感情が擦り合わされている。そのように考えると、チャールズによって鎖につながれ(231)、また最後には叱り付けられるジャックは(304)、「良い」インディアンを目の前にしても感情的な反応を変えることができない人の典型として描かれるキャロラインに対する批判を代理的に受けていると解釈をすることもできよう。

もちろん、以前のようなネイティブ・アメリカンが完全に消え去ったわけではない。「背の高いインディアン」エピソードの後、ローラの家に「汚い姿」をした二人のネイティブ・アメリカンがやって来ると、尊大な態度で食べ物や物色し、タバコ入れを持って行く。ただし、ここでは何故か毛皮を取って行くことについては、口論となり、残して立ち去る(232-34)。つまり、同じネイティブ・アメリカンの中にも「良いインディアン」と「悪いインディアン」がいることになり、さらに「悪いインディアン」にも一定の基準があることが示唆される。

Rileyが集めた「悪いインディアン」イメージの中で最も支配的であったのが、その残虐性である(103-11)。とりわけ女性たちは、自らの身を守る力がないだけに残虐イメージに対する恐怖心は強烈であった。『大草原』においても、「インディアンのお祭り」(Indian Jamboree)と「インディアン雄叫び」(Indian War-Cry)の章で、ローラー家は辺りに響きわたる太鼓の音や叫び声に不安と恐怖の日を過ごすことになる。特に「インディアン雄叫び」の章では、殺気立った叫び声と喧騒が何日も続き、いつもは楽天的なチャールズも万が一に備えて銃の弾を大量に用意し始める(287-88)。隣人のスコット氏とエドワード氏もやってきて対策について協議する(288-

89)。その緊迫した状況から彼らを救ったのが、かつてローラ家にやってきた「背の高いインディアン」であった。部族たちの中で説得をし、まずはオーセージ族が彼に賛同し、オーセージ族が他の部族を抑えることで戦いが回避されたのである。「柏の戦士」(Soldat du Chêne)という名であることがわかったこの酋長の話を知り、チャールズは「良いインディアンが一人いる」と言う(301)。

Smuldersは、この酋長や、パンサーを撃った「良いインディアン」は、ネイティブ・アメリカンにも様々な考えを持つ者がいたことを表現してはいるが、この戦いを回避した結果としてネイティブ・アメリカンがインディアン・テリトリーから退去することになることから、これは白人の利益のために貢献する「良いインディアン」というステレオタイプから脱していないと批判している(198)。たしかに、ここに歴史上起こったインディアン・テリトリーからのオーセージ族を中心としたネイティブ・アメリカン部族たちの強制移住を重ねれば、ネイティブ・アメリカンが白人の圧力に屈するきっかけをつくった人物ということになる。しかしながら、この物語ではそのような屈したネイティブ・アメリカンとして彼は描かれていない。それどころか、次の「去り行くインディアン」(Indians Leaving)の章では、この酋長の高貴さはオーセージ族全体を包み込む徳性へと広がっている。

Pa and Ma and Mary and Laura slowly turned and looked at that Indian's proud straight back. Then other ponies and other blankets and shaved heads and eagle feathers came between. One by one on the path, more and more savage warriors were riding behind du Chêne. Brown face after brown face went by. Ponies' manes and tails blew in the wind, beads glittered, fringe flapped, eagle feathers were waving on all the naked heads. Rifles lying on the ponies' shoulders bristled all along the line(305-6).

ローラ一家が見送る偉大な酋長とそれに続くオーセージ族は、連綿と続く一つの大きな存在であるかのように描かれる。同じように馬に乗り、同じような頭髪と羽飾りをし、馬の上には銃を横たえている。この場面の厳粛さは、酋長だけがもつものではなく、オーセージ族全体が放つものである。もちろん、Smuldersの言うように、かつてインディアン・テリトリーから追いやられたネイティブ・アメリカンの姿がここに重なるということはある。しかしこの堂々とした姿は、打ち破れた者たちのものではなく、自分たちの意思で行動する者たちの自由さと高貴さが表れている。

チャールズの尊敬する視線も、この酋長が単に白人に都合の良いことをしてくれるネイティブ・アメリカンではなく、偉大な人物であることを印象づけている。このことは、いつまでも敵意を捨てず酋長に吠えかかるジャックをチャールズが殴ったことによってさらに強調されている(304)。

他者は自己ではないものとして想定されるものである。したがって、他者表象は自己でないものとして描き出される。白人の自己批判の鏡としてこの高貴なネイティブ・アメリカンが描かれていると考えれば、ここに武力で強引にネイティブ・アメリカンを制圧し続けた白人の歴史への批判を読むことも十分に可能であろう。

ローラはこの時初めてパプスを目にする。物語の最初から追い求めていたものとの遭遇である。その黒い瞳と見つめあった彼女は、思わず「あのインディアンの子がほしい」と懇願し出して両親を困惑させる(308-9)。この野蛮とも高貴とも異なるネイティブ・アメリカン表象にはどのような意味が込められているのであろうか。Elizabeth SegelやHamida Bosmajianは、ローラ

がパプースの中に、文明によって失われゆく自然が内包する自由の世界を見ていると解釈している (Bosmajian 57, Segel 69)。パプースの眼が荒野の神秘を表すというWolfもこれに近い考えといえよう(84)。一方Smuldersは、ローラの子供っぽい要求に白人たちの理不尽に実現されるインディアン・テリトリーに対する欲望を表現していると考え(199)。またRominesは、この場面は白人とネイティブ・アメリカンの文化がその壁を超える可能性を示唆していると述べている(78)。この神秘的なエピソードは、パプースの言説にある白人中心主義と、ローラのネイティブ・アメリカンの世界への共感、さらにこの場面に漂う高貴なネイティブ・アメリカン・イメージが複雑に絡みあっているゆえに、この小説の中でも極めて多義性の高い部分といえよう。

まとめ

構築主義に立つStuart Hallは、表象によって生み出される意味は、文化と時代と共に絶えず変化し続けていると述べている(61)。「大草原」に描かれるネイティブ・アメリカン表象も、出版当時から大きく変化したアメリカ社会そして世界の中で、その意味は次第に変化しつつあると言えよう。ここまで見てきたように、作中の中でも多様なイメージが混在しているのであれば、さらにその意味の変化と解釈の違いが生じるのは当然のことであろう。ここでは、作品の解釈は批評的方法論として様々な可能性があることを取りあえず認めたと上で、この作品の基本的な性質と思われることについて確認しておきたい。

ワイルダーは、「大草原」を執筆し始める前に、ネイティブ・アメリカンについてかなりの調査をしたと述べている。子供が読む物語なので、ネイティブ・アメリカンの描写は正しいものでありたいと考えた。自分の記憶が定かではなかったインディアンのことについても調べつくしてから「大草原」を書いたと述べている(Sampler 179)。その調査の情報源としたものが何であったのかは、今のところあまり明らかになっていない。とりわけどの程度の文献を読んだのか、ネイティブ・アメリカンについてすでに出版されていた文化人類学の研究に目を通したのか、などについては現在のところ不明である。一方、ワイルダーは家族に残っていた逸話も作品の中に取り込んだ、しかしながら本論の初めで確認したように、「大草原」のエピソードはローラの直接の記憶はほとんどなく、また執筆時点では父親も母親もすでに他界していた。さらに加えて『小さい家』シリーズの構成の都合から実人生と大きく異なる設定にする必要が生じていた。つまり、「大草原」は本質的にかなりの虚構性を含んでいる。この虚構性と、それが子供が読む物語であることについてのワイルダーの意識はこの作品を評価する際の基本的なポイントであろう。

たとえば、1869年から70年当時のカンザスでオーセージ族と白人の土地を巡る争いの状況が正確に描かれていない、あるいはチャールズたちが政府によってカンザスから追い出されるのは史実と合っていないなどの批判(Smulders 198-99)は、一定の根拠はもちろんあるものの、この作品は虚構として書かれており、チャールズたちの立ち退きの運命がネイティブ・アメリカンと同じ境遇になるようにバランスが取られていることの意味も十分に考慮すべきであろう。子供向きの読み物としての意図のもと、寓意的な創作が多分にあることを考察の範囲に入れることは、このジャンルの文学を評価する際に必要なことと思われる。

その虚構性の自由の中で、ワイルダーは、家族の逸話からくるもの、当時の文学や大衆文化の言説の中にあつたものを組み合わせて「大草原」におけるネイティブ・アメリカン表象を作り上げたのである。そこには、Berkhoferによって明確化された「インディアン像」のステレオタイプや、Rileyの研究から明らかになったような西部開拓時代女性の持っていたネイティブ・アメリカン・イメージも織り込まれている。一方で、ワイルダーが次第に持つようになった、西部開

拓時代後のネイティブ・アメリカンについてのより正しい理解と過去の不公平な扱いへの反省のもとで描かれるネイティブ・アメリカン像もここにはある。それは、1894年の旅行記に残した、美しい大地を奪われたネイティブ・アメリカンに同情して「私がインディアンだったら立ち退く前にもっと白人の頭皮を剥いでやった」という言葉に垣間見ることができる(*On the Way Home* 28)。

こうした真摯にネイティブ・アメリカンのことを考える態度は、『大草原』の出版後17年以上たってからの修正にも見ることができる。『小さな家』シリーズの出版社であるハーパーズ・コリンズで長年編集者をしてきたUrsula Nordstromが、読者からの『大草原』の表現を変更することを提言した手紙に対する1952年10月14日付の返事が書簡集に収められている。それによると匿名になっている読者の変更意見とは、先に引用した作品冒頭の「インディアンしかいない」の前が恐らくは「人がそこにはいない」(There are no people.)となっていたと思われ、それを現在の版の「そこには移住者はいない」と修正することに関するものである(Nordstrom 53-54)。修正前の表現(「人」)ではインディアンが人ではないように解釈されるという意見に応じて、ノードストロムがワイルダーの意思を確認し「移住者」に置き換えられたのである。そこには、これまでそういった意見を聞いたことがなかったと驚き、同時に心を痛めてすぐに修正案に応じたワイルダーの様子が見て取れる。もちろん、先ほどの「頭皮剥ぎ」の言葉使いに典型的に見られるように、ワイルダーの言説は、今日の多文化社会の価値観からすれば多分にステレオタイプのである。しかしながら、ワイルダーの意図と、この作品の虚構性をしっかりと視野に入れるならば、この作品のネイティブ・アメリカン表象は今日の社会においても有意義な意味をさらに生み出す可能性があると考えられる。

注

- 1 ワイルダーの創作において、娘のローズが大きくかかわっていたことは、残された手紙や日記をもとにFellman, Miller, Holtz, Rominesなどの批評家によって指摘されている。しかしながら、ワイルダーが中心となって作品を完成させているのはあきらかであり(Miller 5-12)、ここではその影響などの詳細な議論には立ち入らない。ローズの政治意識と『小さな家』については、Fellman(2008)を参照。
- 2 Carl Waldmanは、インディアン部族の百科事典で、オーセージ族を馬と銃を手に入れることでネイティブ・アメリカンの中で支配力を強めた部族と紹介している(177)。

引用資料

1 次資料

Little House on the Prairie. 1935. New York: Harper Trophy Book, Harper and Row, 2003.

A Little House Sampler. With Rose Wilder Lane. Ed. William T. Anderson. New York: Harper and Row, 1989.

On the Way Home: The Diary of a Trip from South Dakota to Mansfield, Missouri, in 1894. With a Setting by Rose Wilder Lane. New York: Harper and Row, 1962.

2 次資料

Berkhofer, Robert F., Jr. *The White Man's Indian: Images of the American Indian from Columbus*

- to the Present*. New York: Vintage, 1979.
- Bosmajian, Hamida. "Vastness and Contraction of Space in *Little House on the Prairie*." *Children's Literature* 11 (1983), 49-63.
- Dorris, Michael. "Trusting the Words." *Booklist* 89 (June 1-15, 1993): 1820-22.
- Fellman, Anita Claire. "Laura Ingalls Wilder and Rose Wilder Lane: The Politics of a Mother-Daughter Relationship." *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 15, no.3 (1990): 535-61.
- *Little House, Long Shadow: Laura Ingalls Wilder's Impact on American Culture*. Columbia: University of Missouri Press, 2008.
- Hall, Stuart. ed. *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*. Sage Publications Ltd, 1997.
- Holtz, William. *Ghost in the Little House: A Life of Rose Wilder Lane*. Columbia: University of Missouri Press, 1993.
- McAuliffe, Dennis. *The Deaths of Sybil Bolton*. New York: Times Books, 1995.
- Miller, John E. *Becoming Laura Ingalls Wilder: The Woman Behind the Legend*. Columbia: University of Missouri Press, 1998.
- Nordstrom, Ursula. *Dear Genius: The Letters of Ursula Nordstrom*. Leonard S. Marcus, ed. New York: Harper Collins, 1998.
- Riley, Glenda. *Confronting Race: Women and Indians on the Frontier, 1815-1915*. Rev. Ed. Albuquerque: University of New Mexico Press, 2004.
- Romines, Ann. *Constructing the Little House: Gender, Culture, and Laura Ingalls Wilder*. Amherst: University of Massachusetts Press, 1997.
- Segel, Elizabeth. "Laura Ingalls Wilder's America: An Unflinching Assessment." *Children's Literature in Education* 8 (1977), 63-70.
- Smulders, Sharon. "'The Only Good Indian': History, Race, and Representation in Laura Ingalls Wilder's *Little House on the Prairie*." *Children's Literature Association Quarterly* 27, no. 4 (2003): 191-202.
- Waldman, Carl. *Encyclopedia of Native American Tribes*. Revised Ed. Checkmark Books, 1999.
- Wolf, Virginia L. *Little House on the Prairie: A Reader's Companion*. New York: Twayne, 1996.
- 高田研一 「ローラ・インガルス・ワイルダー」 桂宿子, 牟田おりえ編著 『はじめて学ぶ英米児童文学史』 ミネルヴァ書房, 2004